

経験の蓄積 読み取りたい

災害史の第一人者・北原系子さんに聞く

「災害考古学」第1部では、地震津波の被災地に建てられた石碑

を中心に、日本人の防災意識について考えてきました。津波の記憶を刻んだ石碑を現代にどう生かしたらよいか。災害史の第一人者、立命館大学歴史都市防災研究センターの北原系子客員研究員(78)に聞きました。

——どうして災害史の研究を始めたのですか。

戦争が終わり、みんな貧しかった1946年に小学1年生になりました。津田塾大学の英文科3年

のとき、安保闘争がありました。社会の姿が表に出てくる時代で、英語を学んでいる場合じゃないと、東京教育大学に学士入学し、歴史を学びました。社会を変える動きや時代状況に関心がありました。

卒業後は高校の日本史の教師となり、結婚もしました。やり残した思いから大学院に進み、研究するようになったのが江戸時代の貧困層でした。彼らが対応できなかったのが災害でした。人が災害をどう乗り越えてきたのか、歴史から



災害考古学

第1部

5

らよくわかります。長野で主婦をしていたとき、史料をまとめて安政江戸地震(1855年)を題材にして災害と都市の貧民救済を研究し、朝日新聞の学術奨励金をいただきました。44歳でした。

私は学閥の系譜もない市井の研究者ですから、興味のあることだけ

を研究してきました。でも、2011年の東日本大震災以降、災害史に取り組む人は増えています。——東日本大震災後に津波碑も見直されました。

社会がどうあれ人間の本质は変わりません。日本は地震や津波噴火、風水害などが多く、助け合って災害を乗り越える文化の蓄積もあります。津波碑もその一つです。中国には災害の石碑はあるようですが、東南アジアの津波被災地であるインドネシアには到達記録などの津波碑はありませんでした。

西日本では江戸時代中期に宝永地震(1707年)があり、江戸後

期に安政東海・南海地震(1854年)の津波がありました。西日本の津波碑は、教訓や戒めを継承しようとする傾向が強く、村人や寺など地域の手でつくられたケースが多いようです。農漁村は歴史が古く、成熟したのも古い。村を自分たちがつくってきた自負があり、自分たちで守る意識も強かった。

——現代の私たちは、災害の石碑をどう受け止めていくことができるでしょうか。

災害からの復興は経験した世代では逃げられず、その次の世代への災害経験の継承が必要です。石碑そのものは単純なものです。そこに建てられた意味をどう読み取るのか。歴史学者としては石碑を建てた人と、その地域社会のありようを考えます。地域社会が、犠牲になった方をどう生かそうとしていたのか。石碑から先人の災害経験の蓄積を読み取りたい。外部や研究者からどう評価されようとも、地域の人たちがどう受け止め、どう読み取ってきたのか。そこに価値を見いだしたいと思えます。(聞き手・田中章博)

きたはら・いとこ 立命館大学教授、国立歴史民俗博物館館員、教授などを歴任。中央防災会議の「災害教訓の継承に関する専門調査会」委員を務めた。著書に「地震の社会史」など。編著に「日本歴史災害事典」。

◆「災害考古学」第1部は今回で終わります。第2部は気候変動をテーマに、11月下旬から掲載する予定です。

お住まいの地域に眠る自然災害の歴史に関わる石碑や古文書などの情報を教えて下さい。メール (do-kansai@asahi.com) か、ファクス (06・6201・0179) で。お名前とご連絡先(電話番号など)も明記して下さい。